20250126 降誕節第５主日礼拝

司式：橋本義武
奏楽：山田絵里

前奏：「主キリスト、神のひとり子よ」（D.ブクステフーデ）

招詞：わたしはエルサレムを喜びとし、わたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。（イザ65:19）

讃美歌 18「心を高くあげよう」

交読詩編 44:1-9

01 【指揮者によって。コラの子の詩。マスキール。】

02 神よ、我らはこの耳で聞いています/先祖が我らに語り伝えたことを/先祖の時代、いにしえの日に/あなたが成し遂げられた御業を。

03 我らの先祖を植え付けるために/御手をもって国々の領土を取り上げ/その枝が伸びるために/国々の民を災いに落としたのはあなたでした。

04 先祖が自分の剣によって領土を取ったのでも/自分の腕の力によって勝利を得たのでもなく/あなたの右の御手、あなたの御腕/あなたの御顔の光によるものでした。これがあなたのお望みでした。

05 神よ、あなたこそわたしの王。ヤコブが勝利を得るように定めてください。

06 あなたに頼って敵を攻め/我らに立ち向かう者を/御名に頼って踏みにじらせてください。

07 わたしが依り頼むのは自分の弓ではありません。自分の剣によって勝利を得ようともしていません。

08 我らを敵に勝たせ/我らを憎む者を恥に落とすのは、あなたです。

09 我らは絶えることなく神を賛美し/とこしえに、御名に感謝をささげます。〔セラ

朗読聖書①列王記上 19:19-21

◆エリヤ、エリシャを召し出す

19 エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリシャに出会った。エリシャは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。

20 エリシャは牛を捨てて、エリヤの後を追い、「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか」と。

21 エリシャはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。

朗読聖書②ルカによる福音書 9:57-62

◆弟子の覚悟

57 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。

58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」

59 そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。

60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」

62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

祈祷

父なる神さま、聖名を賛美致します。この礼拝の時を感謝致します。

私たち週の歩みの中で。多くのことに心を塞がれて、思い煩う日々を過ごして参りました。今、ただあなたのみに心を向けるこの場に集められました。

これより鮎川先生の用意された説教を通して御言葉を聞きます。代読される中川信明長老をお守りください。私たちが心を開き、砕かれ、罪の悔い改めに導かれて、新しい一週の歩みへと向かうことができますように。

鮎川先生がお怪我をされています。その痛みが少しでも和らぎ、一日も早く癒されますように。傍らで支えておられる千織さんをどうかお守りください。

このお祈りを、主イエス・キリストの聖名によって御前に御献げ致します。アーメン。

讃美歌 443「冠も天の座も」

説教「弟子の覚悟」　　鮎川健一（代読：中川信明）

2025 年の新たな月が最終週を迎えました。早いものでクリスマスを迎え、新年を祝い、私たちはこの世に生かされている恵みに感謝しつつも、何をもって日々の歩みを受け止め、真実に生きる者として心新たに進むのでしょうか。そこで私たちに本当に必要な備えとは何かを思わないではありません。

一般的に即座に浮かぶことは自然災害への備えや健康への注意、また預貯金や年金、保険、不動産をどう守るかなどでしょう。私自身、血縁内では最後の人となってしまいましたから、様々に浮かぶことは否めませんが、それ以上に必要な備えがあるのは重々承知の上ですが、今朝の御言葉が痛切に響きます。

教会に連なる者として思うことは、主の道を歩む信仰に導かれているとは、主イエス・キリストに従い行くことの一点に尽きます。洗礼を受けるに至った道筋は一大決心とも言える歩みですが、それも信仰告白を表し、神と会衆との前で誓ったことから、主に従い行くとは人生の一時の興味、関心に留まらず、この地上の生涯を終えて天に召されるまで貫くものです。まさに生くるも死ぬるも主を思い、キリストのものとして歩むものです。

更には主に従い行くことが、主の十字架の重く長く太い木と共に、私たちの人生に一本杉としてしっかり串刺しにされて、一人ひとりの証の骨格として現れるものです。

しかし、その道すがら様々な誘惑が私たちを襲います。一つは。人生の苦難や艱難です。キリスト者初心者が思うことには、主に従うことが神の御心にある道ならば全てが順風満帆、万事がうまく行く、信じれば何も問題が起きないと思い、加えて、“**証をしなさい**”となれば、キリスト教を信じたら願ったり叶ったりだという、教会もこれに陥ります。しかし、主はそうとは語りませんでした。

57 節以下を見ますと、主に従うと申し出た人に対して、主は“**それは良かった、大丈夫、すべてはうまく行きます**”とは答えられませんでした。それではカルト宗教や詐欺商法なる勧誘になります。主は「**狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない**」と言います。“**安心して寝る家がない私に従いたいと言いますが、覚悟はありますか**”と言われたのです。ここで“**はい、覚**

悟は充分あります”などと答える人は滅多にいないでしょう。それでも主は厳しく問われます。

少し前の 51 節を見ますと、「**イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた**」とあります。主は、十字架への道をエルサレムに向かって確実に歩み出された時でした。それでも付いて来ようとする人に対して、十字架への道をはっきり示して、その覚悟を確認したのです。

主の発せられた言葉を受けて、神はイエスを見放したとはいえません。御子イエスは神と共に歩まれ、神は常に共におられました。主に従うということは、正に人生の困難、自分の願いのかなわない場面にあっても、主が十字架へ向かわれたときに、神が共におられたことを思い起こし、信仰を失わないことです。私たちが枕するところがないような歩みをするとき、主の歩みと重なります。そういうものです。主に十字架への歩みが復活へ向かわれたように、私たちも信じぬく中で、やがて復活の出来事へ続くと信じています。であれば主の言葉は主に従おうとする人を脅かすものではないのです。もし脅かしなら 59 節の御言葉が全く意味を為し得ません。主は、どんな事情がある人でも主に従って歩んでいくことを望んでおられます。そこには真の命があるからです。主の道を歩まなければ、この地上でどんな富、名誉、祝福を手に入れようと空しいものです。主の発した「**人の子には枕する所もない**」という言葉は、“**あなたが枕するところがない状況の中を歩まねばならないとき、神の御手の中にあることを信じなさい、信じ続けなさい**”と勇気付けられた言葉です。この“**続けて行く**”が、まさに信仰生活、礼拝生活につながります。重ねて言いますが、教会の建物の中に居るか否かではなく、信仰の中にあるかどうか、の違いを示しているものです。

次に待ち受けている誘惑は家族の問題です。主に従うときに、ここで二人の人がそれぞれに申します。一人は、「**主よ、まず、父を葬りに行かせてください。**」。もう一人は「**主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。**」と。一見、正統的に聞こえますが、主は“**その通りにしなさい**”とは言われません。「**まず、父を葬りに行かせてください**」という人には、「**死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。**」と伝え、「**まず家族にいとまごいに行かせてください。**」という人には、「**鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない**」と咎められました。ここで私たちが文字通りに実行しますと、とんでもない誤解と偏見、騒ぎが起きます。過去には、このようなことからも、キリスト教が世間と仲違いし、地域社会を震撼させ、人々を恐怖に陥れるという思いが植え付けられ、今に至っても噂どころか、確実に教会に対する誤解や偏見があることは否めません。よく言えば“**敷居が高い**”ということになり、悪く言えば“**関わりたくない**”となります。そうではないとなれば、冷静にこの時の主の言葉はどう理解すればよいかです。誰にとっても家族は大切でしょうけれども、家族の関係や家族のあり方そのものが、主に従う中で変えられていくということです。

ここで注目すべき言葉は、この二人の人が言った「**まず、父を葬りに行かせてください**」と、「**まず、家族にいとまごい行かせてください**」との共通の「**まず**」という言葉(πρῶτος)です。見過ごしそうな言葉ですが、これは「**第一に**」とも訳せる言葉です。主はこの時、第一に家族との関わりに生きようとする者に対して、“**第一は神との関係だ**”と言われたのです。主が『**山上の説教**』において告げられた「**何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。**」(マタ 6:33)との御言葉と重なります。「**何よりもまず**」が、“**第一に**”、です。

そこで主イエスに従う歩みにおいて何を第一とするかです。一番やっかいなことは、家族が第一の座を主張することです。また、様々なものが神、主イエスを蹴落として第一の座を主張します。日本の社会の中でキリスト教の唯一の神を第一とする生き方を貫くのは容易ではありません。主イエスを第一とするということを貫こうとするならば、そこにはある知恵や工夫が必要です。日本の風習や諸行事は、大半が神社やお寺に関わり、知るも知らずも行われ参加しています。それは日々の生活習慣に密接にあるために、気づかずに習慣化しています。その中でキリスト教会的な、と申しましょうか、信仰者の心構えを主張し、決定しようとしようものなら、非難の矢が四方八方から飛んでくる有様です。だからとて何もかもやみくもに迎合していくことは信仰的に、証し的に歪みが生じます。これをどう理解し、受け止めるものかが問われます。

日本では文化風習の違いも相俟って、宣教に困難さを覚えるキリスト教会です。教会に限らず、キリスト教主義学校や関連施設なども大きな課題を背負っています。しかし、そこに日本の風習、習慣、諸行事、家族の繋がり、様々に意味や課題がありますので、一言で良し悪しの判断を降すことができません。しかしひとつ掲げれば、“**神を第一にする、主イエスを第一にする**”ということをいかにして持ち続けるか、日本ではでは、家族の交わり友人を大切にしながらも貫いていくための一つの知恵があり、工夫があります。世俗の年中行事や冠婚葬祭に対して許容範囲ギリギリのきわどい紙一重の知恵が生まれます。それが妥協ではなく、むしろ宣教の一端にもなっていきます。日本独自の宣教の形になります。

何はともあれ、信仰者とされた者は主に従いいく者となりました。父なる神を、主イエスを第一とする者となったのです。そして、このことだけが私たちを神の国にふさわしい者とします。その歩みは神の国に向かっての、永遠の命に向かっての歩みです。イスラエルの民が、出エジプトの旅で、エジプトの肉鍋を懐かしんだように、振り返って思いに浸る暇がありません。また、この歩みや信仰の経歴が人生経験の如何によって貫けていくものでもありません。あのペトロが主イエスを三度拒んだときも、“**自分は何があっても主に従っていきます**”と明言したにもかかわらず、完全には守れなかったのです。

主に従い行くということは、自己決断の信念にはなく、実に神の見守り聖霊の導きがなければ貫くことができないものです。私たちは神を第一として行く中で、どんな状況の中にあっても、“**神の見守りと導き祝福が私を離さない、離れられない**”ということを信じる者として召されています。それはまさに神からの祝福への招きです。

キリストは生まれる前から十字架への歩みを覚悟して、父なる神の思いに適って、それに従って自ら罪ある者の赦しのために、十字架で肉を裂き、血を流して、この弱く愚かな私たちが、本来十字架へと向かう者が、主イエスによってその痛み苦しみを逃れ、主の招きによって神の祝福の中で歩み続けることを許され、主に従い行く者であり続けることができるように、主の復活の命とともに可能にしてくださったのです。

旧約時代から神の偉大なるメッセージを語られ続け、預言者たちを通して、主の到来、救いの成就は叫ばれていた、そして、御子イエスがこの世に送られてきた、その事実から、神の御子は世を愛し、信じる者が一人も滅びないように御業を為してくださった。この出来事を受けて福音が世に伝えられ、信じる者が興された。にもかかわらずユダヤ人たち、弟子たちでさえ主イエスの言葉を理解できませんでした。……私たちも同じようで

す。あるかなきかの信仰により、この心許なくもなんとか繋がっている、繋げられている、そのような弱さを抱えながらも、神を第一として生きる、弟子の覚悟を今一度心に抱きつつ信仰の歩みを重ねたいと思います。

今なお、世界を揺るがす出来事で絶えないこの時ですが、今より後も神のご支配にすべてを委ね、自らの命を神に返す形において責任を果たし、**“栄光神にあれ(ルカ 2:14)”**との賛美を歌い、信仰の生活を全うする者でありたいと願います。

共に祈りを献げましょう。

慈愛に富み給う父なる神さま、新たな日々を恵みの内に重ね、主の日を通し、2025 年も一月を終える時となりました。今なお私たちは多くの課題に心を奪われることを否めません。足元弱くとも信仰に固く立つ畏れと勇気を与えてください。この世の戦いは益々激しさを増し、終わりの見えない中にあります。

真の知恵と力の源なる主よ、どうかイエスの十字架による福音の御言葉によって、全てがあなたに向けて為されるものでありますように。

憐れみの主よ、今このとき苦難と悲惨にある者たちに主が共にいてくださり、一人ひとりをあなたの元へと帰らせてください。世界にわたってキリストによる一致と平和がもたらされますように。

主によって再び力を与えられ、立ち上がりつつ、時を同じくして献げられます全世界の信仰の友の祈りに合わせて、尊き主の聖名によって御前に御献げ致します。アーメン。

讃美歌 510「主よ、終わりまで」

献金・感謝・主の祈り(萩原孝博)

ご在天の父なる神さま、大いなる聖名を賛美致します。

今朝は、あなたの御前に、あるいはライブ配信にて集うことを許されましたことを感謝致します。

たくさんの御言葉を頂きました。どうぞ、思いを尽くし、力を尽くしてあなたを愛し、あなたが指し示してくださいます道を歩むことができますよう、この地上の歩みをどうぞお守りください。

世界の平和のために祈ります。平和が、ようやく回復の途上にありますが、どうぞ、あなたの平和が打ち立てられますようにお願い致します。

鮎川先生のご健康を、御手をもって癒していただきますよう、ご回復していただきますよう、お祈り致します。

私どもはあなたより豊かな宝をたくさん頂いておりますが、今その一部をあなたの御前に御献げ致します。教会のご用のために用いてくださいますようにお願い致します。

あなたが教えてくださいました主の祈りをもって一巡りの歩みを歩ませてください。**「主の祈り」**…アーメン。

讃美歌：89「共にいてください」

派遣(佃牧師)：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなた方一同と共にあるように。アーメン

報告：定期総会議員名簿の確認；議員となる条件は昨年 3 月から次週 2 月の第一主日の聖晩餐に与った方。訪問聖餐を受けられた方もこれに含まれる。この間、一度も聖晩餐に与っていない方は議員となれないのでご注意ください。今日配りしました名簿に名前の無い方で次週 2 月第一主日の聖晩餐に与った方を追加し教会総会議員を確定する。名簿について、お気づきのことがありましたら、牧師まで連絡を。(佃)

管理委員会：皆さま、お気づきの通り、会堂内二カ所ストーブを設置し、暖を取るようにしている。今日の管理委員会で検討議論を致すが、気づきの点、提案などあれば管理委員に報告願いたい(大隈)。

後奏：「主キリスト、神のひとり子よ」(H. シャイデマン)